Title	理想の風景を歩く : 景観の側面からみる英国と日本
Author(s)	木村, 美里
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 9-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2429
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

理想の風景を歩く
―景観の側面からみる英国と日本―

木村　美里

はじめに

英国の美しさを問われたならば、「自然の美しさ」をそのひとつとして挙げることができる。また日本においても自国の美を語る際、今日でも「自然の美しさ」を挙げる人は少なくないであろう。しかしながら景観の視点からみると、現代日本の自然の美しさ（ないし自然景観）と都市景観は英国のそれとは異なり、必ずしも調和しているとはいえないように思われる。特に英国ナショナル・トラストとその創設者の一人である女性社会改良家オクタヴィア・ヒルの思想と実践を研究し、日本の環境保護と比較する中で、景観は環境保護の中でも重要な位置を占めているといえる。さらに人間の五感を刺激するという観点からも自然豊かな環境と知的意識を高める歴史的建造物が大切であることも周知の事実である。

そこで英国ナショナル･トラストの所有財産の中から事例を挙げ、英国における文化財保護への態度と景観の捉え方に着目する。また江戸後期･明治期日本の都市風景をてがかりに「ひとつの滅んだ文明の諸相を追体験すること」[1]を通して、日本の環境保護における景観美の必要性を考察する。

1．英国ナショナル・トラスト運動の精神

オクタヴィア・ヒルは精神を失った形式ではなく、精神の永続性こそが重要であると主張しており、彼女が創設に関わったナショナル・トラストはその精神を今日も受け継いでいる。ここではトラストが最初に取得した歴史的建築物であるアルフリストン牧師館を永続する精神を体現した一例として挙げたい。アルフリストン牧師館はイースト・サッセクスのアルフリストン村に位置する。この地域の建築様式として最も古いものと考えられており、宗教改革以前の14世紀に建築されたといわれている。牧師館の造りは骨組みが木造であり、屋根が茅葺きの建物である。当時建物の状態は倒壊寸前であり、その保存は急務であるとの認識があった。教区牧師が復元のための運動を行っていたが、匿名の批判やアピールの効果が低いことによる資金不足で作業が難航していた。この牧師に協力していた古建築物保護協会がナショナル・トラストへ相談することを勧める。ヒルもこの建物に関心をもち、古建築物保護協会のメンバーへ手紙を書いている[2]。彼女はこの建物が正しいかたちで残されることを望んだため、慎重に建築家の選定について考えている。それゆえに建物の状態から美術工芸に造詣が深く、迅速に仕事ができ、細心の注意を払える人物を確保する必要があると判断し、このことを受けた古建築物保護協会は中世の技巧に充分知識のある建築家を推薦した[3]。ナショナル・トラストは教会委員会との交渉に入り、最終的に価格10ポンドで牧師館を購入することができた。しかしながら、修復には350ポンドの費用を必要とし、この費用を集めるためにトラストにおける最初のアピールがヒルによって行なわれた。資金調達の状況は漸進的であったが、1898年７月までに事業完成に充分必要な資金が集まっている[4]。現在アルフリストン牧師館は当日の姿のまま美しい庭園と静かな田園風景の中にひっそりとたたずんでいる。そこに見える風景はまさに絵画的である。したがってこの絵画的風景の視点こそが景観の美しさを鮮明に映し出しているといえよう。

以上のことからトラストやヒルの考えで重要な点は、以下の三つの事柄に集約される。第一の事柄は倒壊寸前の建物であってもその価値を重視し、見事に蘇らせたことである。第二の事柄は建物のみを保護するのではなく、周囲の環境を考慮し景観を総合的に捉えていることである。そして

第三の最も重要な事柄は上記の二つの事柄を実現し、永遠に残そうとする精神である。

2．理想の景観美―江戸・明治時代における自然・都市風景―

前節で英国において建物と自然などの保護を含め総合的な視野から景観が捉えられていることを論じたが、現代日本においてはこの点が切り離されているように思われる。しかしながら、過去の日本には他の国が模倣できないような独特な景観美が存在した。そのことを指摘する一例として、日本を訪れた欧米人の見解を挙げる。

チェンバレンは「この国[日本]の魅力は、下層階級の市井の生活にある。素朴な田舎の人びとの親切心にある。日常生活の隅々まで、ありふれた物品を美しく飾る技術、都会の単調を破る桜花、整然と菊花の咲いている庭園に日本の魅力がある。中でも美しい自然の眺めに心を奪われる…確かに日本の美しさは、数え上げれば堂々たる大冊の目録となるであろう。」[5]と述べている。チェンバレンの審美的態度はヒルが自国の自然を愛し、その美しさを書き記した文章と共通する[6]。

次に1908年（明治41年）に海外からの視点で書かれた日本評を挙げる―「Japan is confessedly the most beautiful country in the world.」[7]。『ナショナルジオグラフィック』日本版では、「日本は誰もが認める世界で最も美しい国の一つだ」[8]と翻訳されている。しかしながら、ここでは敢えて「日本は誰もが認める世界で最も美しい国である」と直訳して当時の日本がいかに美しい国として高い評価を受けていたかを強調しておきたい。また、江戸後期の面影も遺す明治期の日本の美しさは、言葉だけではなく写真としても残されており、現代を生きる人々の瞳にもその感動を与えている[9]。

この時代に日本を訪れた海外の人々は日本の自然の美しさ、生物の多様性などを語る。また彼らは母国の風景との相違に驚愕すると同時に、日本の自然美が母国の自然を想起させるとも考えた。今日日本人が英国の田園風景から過去の自国の風景を感じさせることと類似する。欧米人から語られる楽園と感じた日本の魅力は過去に日本の景観の美しさ、日本人の自然への愛と審美眼が確かに存在したことを示す。

このように表明されている日本の美は、今日の日本の景観や風景の荒廃に対する比較として改めて検証すべき事実であるように思われる。日本における美しい風景ないし景観の荒廃はすでに明治期にもみられているが、文明のさらなる発展と歴史的背景を経て現在危機的状況となっている[10]。一方でこの状況に警鐘を鳴らし、改善に取り組む努力が進められる中、他方では自然環境の破壊はもちろんのこと、伝統ある日本橋の上にかかる高速道路、圧迫するように乱立してそびえ立つ高層マンション群、景観の統一性を無視した住宅や大型ショッピングセンター、網の目のように張り巡らされた電線類、開発と経済および精神的事情により原形を留めない、もしくは取り壊されてゆく文化財など、現在の日本はその景観や風景を保護するために解決しなければならない諸問題を多く抱えている。

それゆえにこの問題を是正するために理想の景観を求めるならば、具体的な目標を先述した景観の美しい時代にみることができる。

おわりに

これまでにガイドブックに掲載された写真と現実の風景が異なり落胆した、あるいは写真を撮る際に電線類が美しい景観を遮断したなどの経験はないだろうか。

ヒルが述べるように形式ではない精神の永続性は重要である。それゆえに日本で失われたといわれる文明の追体験は、「古きよき日本の愛惜とそれへの追慕」[11]を喚起させる手がかりであり、このことが景観という環境保護の精神を育成する上で重要である。近代建築を否定するわけではないが、建設する場の選定、近隣の人々への配慮および周囲の自然･建築との調和などを慎重に検討する必

要性が感じられる。先述したとおり現在の日本の都市景観において解決すべき課題は多く残されている[12]。この課題と向き合うためには短期的・長期的ヴィジョンの両方で取り組まなければならない。短期的にできることとしては、これ以上景観破壊を生み出す要因を行なわないことであり、また、現行の建築・景観・環境に関する法規定の遵守である。長期的な視野としては英国ナショナル・トラストの創設者たちが50年・100年後の英国の美しさを考えて活動したように、わたしたちも一歩ずつ着実な歩みの中で50年・100年後の日本の美しい景観を保護ないし創りだすことを目標としてゆくべきである。当然のことながらその目標を目指し、努力している人々がすでにいることも忘れてはならない。しかし、理想の風景の回復は可能であるか—この問いへの回答がどのようなかたちで将来描かれるかについての責任は、今日の環境保護・都市計画に対する一人ひとりの意識の中にあるといえよう。

注

1　渡辺京二『逝きし世の面影』（平凡社、2006年）、65頁。

2　The National Trust, *Alfriston Clergy House*（Swindon, 1995）, p. 13.

3　Graham Murphy, *Founders of The National Trust.*（London, 2002）, p. 108.グレアム・マーフィ『ナショナル・トラストの誕生』四元忠博 訳（緑風出版、1992年）、168頁。

4　The National Trust, *op. cit.*, p. 15.

5　引用文の［ ］部分は著者が説明のため加筆した箇所である。チェンバレン『日本事物誌 2』（平凡社、1969年）、220－221頁。また日本人による日本の風景保護を説いた文献には志賀重昂『日本風景論』（岩波書店、1976年）などがある。

6　Octavia Hill, “Natural Beauty as a National Asset” in *The Nineteenth Century,*（London, 1905）, p. 940.

7　J. H. De Forest, “WHY NIK-KO IS BEAUTIFUL” in *National Geographic Magazine*,（Washington, 1908）, p. 300.

8　日経ナショナルジオグラフィック社『National Geographic 日本版「ナショナルジオグラフィックが見た日本の100年」』、（日経ナショナルジオグラフィック社、2004年）、23頁。

9　小西四郎、岡秀行構成『百年前の日本　モース・コレクション［写真編］』（小学館、2005年）を参照。ただし、明治期の都市ではすでに架空電線が存在し、今日ほどではないが景観の美しさを損ねる側面もみられる。

10　渡辺、前掲書、450頁。

11　この文献で意図したことではないと文献著者は述べているが、結果的に追体験することでその時代の自国の美しさを意識することができる。渡辺、前掲書、65頁。

12　景観と文化財保護における課題については稲垣栄三『文化遺産をどう受け継ぐか』（三省堂、1984年）および土田旭、都市景観研究会編著『日本の街を美しくする』（学芸出版社、2006年）などを参照。

参考文献

Hill, Octavia. “Natural Beauty as a National Asset” in *The Nineteenth Century*, 58,（London, 1905）.

Murphy, Graham. *Founders of The National Trust*. New ed.,（London, The National Trust, 2002）.『ナショナル・トラストの誕生』四元忠博 訳（緑風出版、1992年）。

De Forest J. H. “WHY NIK-KO IS BEAUTIFUL” in *National Geographic Magazine*,（Washington, National Geographic Society, 1908）.

The National Trust. *Alfriston Clergy House*.（Swindon, The National Trust, 1995）.

稲垣栄三『文化遺産をどう受け継ぐか』（三省堂、1984年）。

小西四郎、岡秀行 構成『百年前の日本 モース・コレクション［写真編］』（小学館、2005年）。

志賀重昂『日本風景論』（岩波書店、1976年）。

チェンバレン・B・H『日本事物誌 2』高梨健吉 訳（平凡社、1969年）。

土田旭、都市景観研究会編著『日本の街を美しくする』（学芸出版社、2006年）。

日経ナショナルジオグラフィック社『National Geographic 日本版「ナショナルジオグラフィックが見た日本の100年」』（日経ナショナルジオグラフィック社、2004年）。

渡辺京二『逝きし世の面影』（平凡社、2006年）。

（きむら・みさと　聖学院大学総合研究所特任研究員）